WASON
374+
Aug. 1894
no. 391

明治十八年初刊

女學雜誌

每週土曜日發兌

第三百九十一號

要目

女生徒の卒業と婚嫁

女學生、家を成して評判あしきは何故ぞ。其罪、教育にあらず、彼女にあらず、寧ろ父兄と良人とに在る所以の新説を表白して、大ひに世の人を驚ろかす。左れど之れ驚くべきに非ず、當然の理也。

德川家康老後の教

此の老偉人が何如に周細巧妙なるかを見よ、經驗は神聖也、就中、偉人の經驗は、尤とも神聖なり。

普魯士亞獨立戰爭に於ける哲學者大牧師

「吾國民」を招ぐフレデリッキ王の檄告たかし、ナポレオン大帝の威權尙ほ赫々たり。時に、ベルリン大學の哲學者及び大牧師は何如にして起ちし。須らく深邃にして高貴なる達人の慷慨を聞くべし。

皇后宮陛下の御教

陛下さきに華族女學校に行啓あり、例を古今に引き、感慨を當今にもらし、縷々數千言、御教を校長に垂れさせ玉ふ、傳聞し奉つるもの、何人か感泣せざらん、謹みて拜讀せよ。

紅葉が隣の女

あゝ此の一小說、麗語ありて險語なく、艷詞ありて淫詞なし、夏日榻上に一と度び讀みて些さか人生に悲しむ所ろなうつす。

明治二十七年八月四日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百九十一號目録

社説
女生徒の卒業と婚嫁

論説
美海の藻屑(潮陽)
(一)敍事詩と敍情詩と戯曲と
(二)藝は實と虚との皮膜の間にあり

家政
幼兒の玩具に注意せよ(續)渓流女史
破壊しやすきもの
玩具の弄ばせ方
注視るを妨ぐべからず
故なく新しき玩具を與ふるなかれ
同時に數種の玩具を與ふるはあしゝ
幼兒の自由はなるべく妨ぐべからず
幼兒の玩具をいれたるものは自整頓せしむべし
女兒の玩具

史傳
會津城の婦女子(完結)
ヘルバルトの母(上)鷗村

文壇
家康老後のおしえ(上)

小説
橋松佳話(第六回)花圃女史
松のさかえ

隨感
普魯士亞獨立戰爭に於ける
哲學者及び大牧師

書架
夏の家庭
天然と人
隣の女(蕉象)

時事
皇后宮陛下の御おしえ
必勝の戰、既捷の戰
関氏及支那人
王子孤女學院
女子夏期學校
塚本ふぢ女史
成瀬仁藏氏――大坂梅花女學校
ウイラード歸らんとす

徒然草
筆彰録(三)蕉雨生
記者欲

時報
兵庫縣に於ける裁縫專修科の設置○仙臺高等女學校の設置◎女子慈善館設立の主旨○奈良縣知事の風紀取締○大日本婦人有志會○佛教女流教育會◎日本赤十字社錄事

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百九十一號

明治二十七年八月四日發兌

社説

女生徒の卒業と婚嫁

本年夏期、普通教育の學科を卒へたる女生徒多かるべし。そが中に現に婚嫁の相談にあづかるものも尠かるまじ。

夫れ、家を成したる女學生の不評判は、今にはじめぬことなり。醫者に不養生者多く、經濟學者に家道の修まらざるもの多きが如く、女學生より賢良の家政夫人を出すとの少なきは、世上の諺となりぬ。

此に於てか、新法の女子教育に反對するもの、直ちに說を家政の修まらざるに採り、隆んに古風の教育を賞めて今の女學を斥ぞく。

左れど、女學生が家を成して屢ば惡評判を蒙むる所以のものは、其罪、今の女子教育にあらず、今の女學生にあらず。實に其父兄たるもの、及び其の良人たるものにあり。

何を以て然か言ふと問ふものあらば、吾人は先づ「女學生が家を成して評判あしき所以、何處にありや」と反問せん。見よ、彼女は、妻として有すべき第一の覺悟を欠けりや……即はち、彼女は、良人が事業に同情を表し、良人が苦心に慰藉を呈し、良人が運命に歡從する等の所存を欠きて、而して、良人が協議に冷々とし、万一の決心を聞ひてヲロ〳〵とし、之を引とめ、更に其の足手まとひとなるが如き見ぐるしき欠典ありと云ふ乎。……蓋し、彼の反對者と雖ども、此等の覺悟に於て、今の女學生が不足なりとは惟ふまじ。寧ろ、此等斷乎たる覺悟に於ては、サスがは學問をしたる婦人なりとて、密かに感服するとあらんは、必せり。

左れば、世の所云る女學生夫人の不評判なるものは、其事、極めて些細の落度に由來す。曰く、彼は、煮たきに不案内なり。彼は、掃除取片付に亂雜なり。彼は、客のあしらひ方を知らず。彼は、親類つき合ひの習慣を輕ろんず。彼は、下男

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

下女の使ひ方にくらし。彼は、儉約の術を知らず。彼は、廢物利用の覺悟に乏し。彼は、物の言ひ方が、書生風なり。彼は、お辭儀の仕樣が悪るしと。一々、列擧し來るも、大率、此類に過ぎず。

然り、此等の落度は、確かに、今の女學生に免かれがたし。吾人、決して此をしも辯護するとなし。左れど、此の如き落度ある所以のものは、抑そも、女子教育の罪か、女學生自己の罪か。曰く、もとより「二者全く之に關係なし、罪に淸淨なると雪の如し」とは言はずとするも、罪の尤とも多きものは、父兄にあり、良人にありと斷言して憚かるとを要せず。敢て問ふ、父兄たり良人たらんとする諸君。諸君は、具とに今の女學校なるものを知る乎。今の普通の女學校なるものは、即はち普通教育の女學校なりと知る乎。書生一百、之を級に分つ。各級、二三十、授業五六時間。寄宿するものあり、通學するものあり。學限、三年、日も亦た足らずして、普通の智識を教授す。これ、尤とも必要、亦尤とも穩當なる普通教育法に候ぞ。

左れば、如此き教育を主旨とせる、普通女學校に在學したる書生にして、彼の十年朝夕庖厨に經驗したる婦女子に劣らぬほど、煮たきの術に熟練し、又、實地に下男下女を使用する經驗に積み、而も、親類つき合ひ、客あしらひ、實地儉約の秘傳などに精はしからしめんとするは、元來不當の所望なりと云ふべし。今の女學校なるものは、如何に工夫するも、此等の所望に應じ得べからず。又、應ずべき筈のものにあらざる也。若し、普通教育なるものの、性質と効用とを辨知せざる人あらば、吾人不肖といへども別に精論する所ろあるべし。左れど、既に普通教育の性質と相當の効用とを辨知したらんものにして、其卒業生に對して直ちに前記せる一類の所望を需むるが如きは、具とに事態を辨まへざるものと云ふべきなり。

此故に、今の云謂る女學生夫人の落度なるものは、元來、普通女學校に於て教授したる上の落度にはあらず。抑そも未だ教授せられざるが爲めの欠典なり。故に、其落度の罪は、女學校の教授に歸すべからず、女學生自己の覺悟なきに歸すべからず。此の罪は、當に父兄と良人とに歸すべし。即はち、未だ此の所望に適應したる教育を施こさずして直ちに婚嫁せしめたるは、父兄の落度なり。未だ此の教養あらざる筈なる

を辨知せず、普通教育を卒りたるのみにて十分なりとし、急に之を娶るヿをなしたる良人の落度なり。落度は、父兄と良人とにあり。罰は、自己の頭上に落下すべし。然るに何んぞや、無責任の地に立つて、反つて女學生夫人を冷評し、「イヤハヤ女學校出の細君には困る」など評判するに至ては、何等の無禮ぞ。困るは、自から困るにあらずや。自から荷を負ふものは、重からざるを得ず。自から首を〆れば、困るしからざるを得ず。不見識なるによつて、事理を誤まりたるものは、無論、其罰を受けざる可らず。

左れど、あわれむべし。此等の落度は、必竟、「普通教育」と云ふヿを辨知せざるによつて來る。女子の普通教育とは、女性の普通の開發なり。齊家、育兒、勤儉、内助、の大躰は、もとより之を教授すと雖ども、普通教育は普通教育にして、元來、專門教育にあらず、工藝教育にあらず、實地修練にあらざるが故に、其書生に向つて直ちに、煮たき、召使ひ、交際、儉約、等の實際の伎倆、實際の經驗を望むべからざるは、勿論なり。然るに、尚ほ斯の如き明白なる誤解を爲すもの丶多きは、諸人事に信切ならずして、其當然の理を察知するヿを勉めざるに由る。

此故に、方今の急務は、世人をして、女子の普通教育の性質と當然の効用とを明らかに知覺せしめ、普通教育の卒業后直ちに婚嫁するが如きは、極めて不自然、極めて不順序なる所以を辨明するに在り。而して、不順序、不自然の所行によりて、失敗することあらば其過まちは、此如き不當急激の所行を爲さしめたる當務者の責に在るヿを明らかにし、以て他に寃罪を負ふものなからしむべし。

惟ふに、此如くせば、今の女子普通教育が負へる寃名は、過半消失すべし。女學生夫人が言ひかけられし不評判は、過半他の責にうつり、反つて巨多の同情を受るに至らんか。

左れば、普通の女學校を卒業したるものは、卒業後、一二年、自己の家庭に居り、又は、他の相應したる家庭に見ならひ、もしくは、此の目的の爲めに特設せし女塾に入つて、茲に初めて、齊家内助の實地の經驗を受べし。而して后ち道を履んで有縁の人に婚嫁すべし。此を教育上至當の順序となす。此の至當の順序を履まざるの罪は、何處にか歸せん。今の父兄良人、正に三省して可也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

論説

美海の藻屑

潮陽

遙かに審美の海原を見渡せば、逆捲く涙風いさも荒らく、あやめもわかぬとしば〳〵なり。去ぬる年に舟出せる鷗外、逍遙、忍月等の先蹤は、もはや彼岸に漕ぎ寄せしにや。後進のやつがれ、熊谷氣取りて追ひ付かん程の勇氣もなく、ミューズの神には、うしろむけられ、獨り沖の眞中にさまよひて、何處をそれとよるべ汀の捨小舟に、さほさし、わづかに探り得たる、美海の藻屑、珍らしくもあられども、あるは消夏の一興ともなりぬらんかと、斯くはなん。

（一）　叙事詩と叙情詩と戯曲と

◎若し哲學をもて科學中の科學なりと稱するとを得ば、戯曲は詩歌中の詩歌なりと云ふを妨げず。哲學は科學を總括して餘す所なきが如く、戯曲は叙事詩叙情詩を包含して、更らに特色を有す。若し夫れ之を劇場に演するに至ては、百藝を網羅し了して、英華精粹を集む。爰に於て乎、美術中の最優高雅の美術となる。されぱヘーゲルは、戯曲を以て、叙事詩と叙情詩との、互に偏重したるものを、一致せしめたるものなりと云ひぬ。ハルトマンに至つては、其言簡潔にして能くそが要を盡せり。曰く、

Während die Epik das einseitige Uebergewicht der objektiven Anschauung zeigt und das subjektive Gefühl nur als verhaltenes leise hindurchklingen lässt,—während die Lyrik das Uebergewicht des subjektiven Gefühls über die objektive Anschauung zum Ausgangspunkt hat, und alles Heranziehen der objektiven Anschauung ihr bloss als Hülfsmittel zur Steigerung und Vertiefung der Gefühlssubjektivität dient, strebt die Dramatik nach Wiederherstellung des Gleichgewichts von Anschauung und Gefühl. (Eduard von Hartmann's. Aesthetik. Bd. II. Philosophie des Schönen. S. 745)

叙事詩は客觀的相に重きを置くものにして、かの主觀的感情は唯僅かに響くのみ。之に反して叙情詩に於ては、主觀的感情は偏に客觀的相に勝つものにて、偶々客觀的相の入るあるは、唯その感情の主觀を高むる助けとなるのみ。然るに戯曲に於ては、右の二門の相と感情との同量即ち平均を回復せんことを力むるものなりと(右原文の義釋)

此意を案ずるに、叙事詩とは作者自身の感情を隱蔽して、單に外界過去に於ける事跡を、そが有りのまゝに叙述するものなり。叙情詩とは作者自身の感じたる主觀的情を直接に説話するものなり。故に前者は英雄豪傑の花々しき事業を(作者の感情を混入せずして)客觀的に叙し、後者は作者の主觀的感情を直寫するものなり。然るに戯曲は此二者を包含して餘りありとす更に換言せば叙事詩は外部の働きや過去に於ける人生

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の出來事を說話し、敍情詩は內部主觀のみの出來事を表すに止まるも、戲曲は敍事詩が外部を說話して、內部の敍述を欠くを補ひ、敍情詩が內部に偏して、外部を欠くを補ふものにして、外部をも說話するは素より、特に多く內部の出來事を說話する者也。敍事詩家の說話する所は、人生の過去に於ける運命に過ぎざるに、戲曲は人心の奧底、即ち自識より生じたる實狀を說話するなり。而して戲曲が敍事詩の如く過去を說話するや、之を過去として表はすにあらで、現在として表はすものなるを記せざるべからず。

然るにショウペンハウエルは、敍情詩に於ては主觀の元素が支配し、戲曲に於ては獨り客觀をのみ表すとし、敍事詩を以て二者の欠所を調和するものゝ如く說かれしふしあり (Wie demnach in der lyrischen poesie das subjektive Element vorherrscht, so ist dagegen im Drama das objektive allein und ausschliesslich vorhanden......(Die Welt als wille und Vorstellung. Bd. III. S. 408) とはわが容易に首肯するを得ざる言なり、記してしばらく疑を止む。

(二) 藝は實と虛との皮膜の間にあり

◎我が國の大戲曲家と稱すべき近松門左衛門の所說は、往々今日の審美學者の所說と相適ふふしあり。左の一話は多少世上に知られしものなれども、われ之を讀む數々にして、興味を感ずると以前と異ならず。まことに千古不磨の言なりと信ず。

「ある人の云、今時の人はよく〳〵理詰の實らしき事にあらざれば合點せぬ世の中、昔語にあることを當世受取らぬ事多しされば こそ歌舞伎の役者なども兎角その所作が實事に似るを上手とす、立役の家老職は本の家老に似せ大名は大名に似るを以て第一とす、昔の樣なる子供だましのあじらけたる事は取らず。

近松答云、此論尤の樣なれども藝といふ者の眞實のいきかたをしらぬ說なり、藝といふ者は實と虛との皮膜の間にあるものなり、成程今の世、實事によくうつすを好む故、家老は眞の家老の身ぶり、口上をうつすとはいへども、さらばとて、眞の大名の家老などが立役の如く顏に紅脂白粉をぬる事ありや、又眞の家老は顏をかざらぬとて、立役がむしや〳〵と髭は生なり、あたまははげなりに舞臺へ出て藝をせば慰になる

べきや、皮膜の間といふがこゝなり、うそにして虚にあらず實にして實にあらず此間に慰が有たものなり、是に付て去る御所方の女中一人戀男ありて、互に情をあつく通はしけるが女中は座敷の奥深く居玉ひて男は奥方へ參るとかなはねば、たゞ朝廷なんどにて御簾のひまより見玉ふも、たまさかなればあまりにあこがれ玉ひて其男のかたちを木像にきざませ、面躰なんども常の人形にかはりて其男に毫ほども違はず色艶のさいしきはいふに及ばず、毛の穴までをうつさせ、耳、鼻の穴も口の内、歯の數まで寸分たがへず作り立させたり、誠に其男を傍に置て之を作りたる故、その男、此人形とは神のあると、なきとの違ひのみなりしが、女中是を近付て見玉へばさりとは生身を戀に、うつしては興のさめて、ほろぎたなくこわげの立ッ物なり、さしもの女中の戀もさめて傍に置たまふもうるさく、やがて捨られたりとかや、是を思へば生身の通りを、すぐにうつさばたとへ楊貴妃なりとも、あいそのつきたる所あるべし、それゆえに畵そらごとゝて其像をゑがくにも、木にきざむにも正眞の形を似する内に、又大まかなる所あるこそ結局、人の愛する種とはなるなり、趣向も此如く本の事に似る内に、又大まかなる所あるが、けつく藝になりて、人の心慰みとなる、文句のせりふなども、このこゝろ入れにて見るべきこと多し」と。(難波土產)

そも藝は「實と虚との皮膜の間にあり」と云ふが如きは、則ち今日の所謂實際主義の寫實にもあらじ、理想主義の妄想にもあらじ、實に似て眞實にあらじ、理想の虚なるものありて、しかも全くの虚にあらざる中間にありと云ふに異ならず「正眞の形を似する内に又大まかなる所あるは結句人の愛する種となる」と云ふに至ては、現今の最も進歩したる審美學の理に適ふものと云ふべきなり。我れは敢て比論せんとするにもあらじ、又比論すべき性質のものにもあらねども、ハルトマンが美の所在を論ずるに當り、一方には、幼稚なる實際主義の誤謬を排し、他方には主觀なる理想主義の誤謬を斥ぞけて、新たに先天(超絶的)實際主義を立てたる個所を味ひたらん後更らに近松が言を撿すれば、誠に面白きものあるを認めずんばあらず。

夏の夜をねぬに明ぬといひ置し、
人はものをや思はざりけん　八丸

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

家政

幼兒の玩具に注意せよ（續）

溪流女史

ひとこと添ふべきは、前の稿の「破壞やすきもの」には猶數行かきつらねありしが、編輯のをりあやまちて切りすてぬ、再かしこより書きてよとかゝりの方の告げこしたまひつれば、重復もいとはでまたこゝより初じむる事とはなしぬ。（三百八十六號の續）

破壞やすきもの

は市中にて求むる玩具に甚多きものなれど、こは總てよろしからず。やゝ記臆力の發達せる幼兒に在りては、手馴れたる玩具の損ひ破れなどする時は、たとひ美しく新らしきものを得さすとも、ふるきを惜しみたづねて、泣きむづかるためし少なからず。こは最喜ぶべき習慣にて、よく養ふべきことなり。去れば初より、あまり破壞やすからぬものを撰びあたふべきなり。また自然に破れ損ずるものはすべきやうあらねど故意とやぶり損ふ習慣はよろしからず。我意にまかせて玩具類を破り損はしむれば、遂に手にあたる障子ふすま、書物新聞紙など押破りて樂とするの悪習慣を養ふに至るべし。總て前に擧げたる諸項に注意して玩具を撰ばゞ、やゝあやまち少からんか。猶左に

玩具の弄ばせ方

を説きて此稿を終らんとす。以上に述べたるが如く注意して有害ならざる玩具を一度幼兒に與へなば次の如く細かに注意するを要す。幼兒のいまだ手足も自由ならず、やうやく玩具の色形狀などにのみ、眼を止むる比ならば、謹でその、

注視るを妨ぐべからず

たとひ見る事を遮らざるも、聲をもて又は一層美しきものをもて其注意を他に奪ふべからず。もし既に玩具を手にして遊ぶほどとならば、倦きて捨つるに至るまでは決して

故なく新しき玩具を與ふるなかれ

常に幼兒が倦厭する前に新規なるものと取り換ふる習慣をつくれば倦きやすき性質を養ふのみならず遂に新規なるものを

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

もさして歡ばざるに至らん。されども幼兒は又存外に倦き易きものなれば、倦きたる玩具は藏め置きて、又程すぎて取りいだし與ふべし。かくせば幼兒は常に珍しきを歡ぶに至るべし。

同時に數種の玩具を與ふるはあしゝ

とは專心一意の良習慣を破ぶるのみならず、玩具に就きて幼兒が得る智識もまとまらざるが爲に、大に害せらるゝを以てなり、たとへば大人が同時に數多の事業をなすが如し。然れども智識進歩の程度をはかり、同時に數種の玩具を利用して自ら遊ぶほどとならば却て變化ありてよかるべし、こは偉人が數多の事を處理して失敗せざるが如くなればなり。

すべて玩具を弄ばしむるに就きて注意すべき主なる要件は

甚しき害とならざる場合に於ては、よくその意向を察し、

幼兒の自由はなるべく妨ぐべからず

幼兒は其自由の爲に多少苦痛を感ずるとも、これに堪ふる力は割合に多きものなり、たとへばこゝに杖を得て、得意に振り廻はしつゝ歡べる幼兒ありとせよ、もしこれが危險なるを憂ひて、取り上げなば、幼兒はいつかに怒りてむつがるべきか。これに反してそを無意に弄びて、多少頭部などに打あてたりとするも、もとよりさして危險なるものにあらねば、甚しき危害はあらざるべく、且幼兒は、己れの意志に反して取り上げられたるよりも其むつがる事は少なかるべし。されば、幼兒に自由をゆるす爲にひとしほ玩具撰擇の必要をさとらん。

幼兒の眼に觸るゝ處には手に渡すまじき品はをくべからず

一度幼兒の眼に觸れて切にこれを望むを、たゞ妨害的に與へざるは甚あしゝ、速にこれに似て、且與へ得べき品物と取り換へて與へ決して所謂意地惡るき行爲は戯にも見すべからず。されば最初よりかゝる物品は幼兒の眼に觸れざらしむるにはしかじ。

幼兒の諸能力やゝ發達して、少しく聞きわけあるほどとならば決して手を觸るまじき處はよく敎へて其命令を聞かしむべし。例へば父の机母の針箱の類なり、而して又これと同時に

幼兒の玩具をいれたる物は自ら整頓せしむべし

かゝれは無言の間に自他の區別を知らしめ、自治の精神を養はしめ、且整頓の習慣をつくるに至らん。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女兒の玩具

は性れつき男兒と異りて、男兒に歡ばるゝ棒ちぎりは却て女兒には好まれずして、赤き切などを歡ぶ。これ先天的に男女嗜好の異なるならんか。

これに就きても猶論ずべき事甚多く、且此他幼兒にきかすべき談話見すべき、繪畫より進みては諸の博物學上の智識の基礎を置くべき事等あれば閑を得て次々に述べ、讀者諸姉と共に幼兒敎養なる大問題を研究せん。（をはり）

史傳

會津城の婦女子（完結）

◎**籠城も家居の如く** 戰塲も平地の如く、不思議にも、負けるなどとは毫しだに思ひ付かざりしが、九月中ごろ過る比ろより、乾飯、天主台の下より取出されて用ひらるゝこととなりしかば、最早や事了れりと初めて望を失ひたり。

◎**降參の一と聲いづこともなく** ひゞき來りしは、九月二十二日にて、城内ヒツとしづまり、萬籟やんで幽溪ものすごき迄に心ぼそき感じを爲しける。時に命あり、降參の二字を大書したる白旗を縫へよとなり。いかなればとて、降參の旗は縫ひがたしと辭し申せしが、もとより致し方なく、亦復た強ひて仰せ付けられたり。

◎**九月二十三日城あけ渡し** 昨日まで之に枕らして打死せんと思ひつるものを、ムザ〳〵敵にわたして、万事の指圖を請ひ、通行のみちさへ、もはや借用のわけにて、跼天蹐地、遺恨腸をたつ。吾が譽れ、吾が誇り、吾が詩歌たりし美なるお城をあとにして、スゴ〳〵城門より出んとする也。

◎**男子女子それ〴〵出る門を別にしたり** 婦女子が一隊に列んで、出でゆく樣を見れば、髮は斷つて尙ほ梳けづらず、身は日にくろみて而も浴みせず、老いたるを扶け、幼なきを率き、こゝろも輕ろく、足けがれて、淺ましきと限りなし。

◎**城門の左右** には、官兵遠く相列らんだり。其が間だを通つて、げふ〳〵しく罷り歩ゆむ。心なのつわもの、烈婦の情想を知らずや。あざけり笑つて指ざし罵しる。「落人」の一ト聲を耳にして、思はずふりかへり、懷劒に手をかけしものも少

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

なからず。山川唐衣女史の如き、其が斷髮を見て、所天を失ひしヤモメの不憫さよと罵しる兵士をにらみ、即吟す、

　長ひ黑髮だてには切らぬ、
　　賊を征伐するが爲め。

曰く、賊。彼等は皆な官軍を呼んで賊と言ひけり。やゝ改良したるものは、官賊と言ひけり。

◎羨やましきは先だちし人なり　花々しく戰塲に打死し、又はお城の内に、最期を遂げぬ。われ等、なまじひに生命ながくして、此の恥を見る、

　おもひきや捨てし生命の今日までも
　　ながらへて世の憂き目見んとは（雜賀女史）

顧りみて、城を望めば、小山田は殘り惜しげに夕日を送り、柵壁は、霞をはらつて遠く名殘をしめすらん。

　あすの夜は何處のたれか眺むらん
　　なれしおう樹に殘る月かげ（川崎正之介）

行くに輿なし、歸るに家なし、國破れて孤城雀鴉みたる、何の地に君を置き又親を置かん。あゝ是れ當日、城を出る万人のこゝろなりけり。

◎退去する道筋違へりとて　中途に二三時間も待たせられ、特別のあしらひなりとて、田圃のこみちを通行することを許さる。日くれて、あかしなく、星遠くして、寸前尙ほくらき時、足を泥濘に沒して、いと細きあぜ道を行く。餓るものあり、困倒するものあり、悲鳴するものあり、切齒するものあり。夜半やうやくある舊寺に着して、こゝを宿と定むべきよし宣告をうく。

◎されど感謝すべきは　白米のにぎりめしなり。此時與へられし如きは、城に入つて以來なき所ろ、其の味わすれがたし。捨松女、手をうつて「白いの」〳〵と叫び喜こぶ。

◎寺に合宿すること數日　四五百人の婦女、それ〴〵にわかれて、心あたりの百姓屋にやどる。官より賜はるもの、一人に付、二人扶持と銀一朱。家老用人の奥方も、村婦と伍して、水くみ、飯かしぐ。初めは、不斷懷劍をはなさず、夜も帶とかずありしが、やうやく心ゆるむにつれて、貧乏不自由のくるしみは、籠城の苦しみよりも苦しく、何故さきに打死はせざりしと、幾度びか歎かれたり。

◎斯すること三年　夜はしとねを敷かずして伏し、朝は雀と共

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に起き、山に木こりし、川にあらひ、肥料をかつぎ、野菜をそだて、米をつき、繩をなふ。純然たる農家の人なり。時にうたあり、

會津きたかた山まんなかで、
手鼻かむとはしぼらしひ。

◎籠城の昔を忘れじとて　箸箱のうらに歴々いましめを記し、一日一度かゆをすゝり、氣力をもて貧乏にうちかち、先人を念ひて后日を樂しまんとすれど、弱きは人の心とて、平ならぬとも多かりけり。されど、東京にある山川健二郎氏その他の男書生は、蛙をころして菜となすほどの貧苦のよし聞き傳へて慚愧したり。

◎三年むなしく過て　君家の事未だ定まらず。大殿樣は因幡さまに。若殿さまは有馬家に。照姫ぎみは紀州におあづけのまゝなり。お家の前途いかん。微臣罪あり復た何をか歎かん、聞ならく天王元と聖明、我公日を貫ぬくの至誠を發し、恩賜の赦書應さに遠きに非ざるべしと、幾度びか手を額ひにして京城を望む、

吹く風のかたも定めぬ中ぞらに、
たゞよふ雲ぞ身のたぐひなる。

◎明治三年則はち赦書あり　君公の罪赦されて、會津二十八万石沒收せられ、新たに南部不毛の地に三万石を下さる。士民もとの如くなるに、十が一をもて支へんとす。抑そも何如にして生計を得べきや。こゝに於てか、七百名の數をかぎりて、歸農歸商を許し、其他は皆な南部に移住す。臣民上下の差別なく、みな同格に南京米を割賦さる。大人一人に付三合、小兒二合。たゞ之をもて日を送るべくとは定まりたり。

◎生き存らへしが　幸か不幸か。此の如き困苦、如此き恥辱を見たるが、幸が、不幸か。但だ明白に一事を知る、會津武士及び其の婦女子、何んぞ初めより、天皇に叛かんや。誠忠奉公一死あり、義俠、得喪なし。國を敗り、身を殺して、三百年間の舊情誼に報ゆ、亦何をか憾みとせん。籠城に膽を練り、田間に心を鍛え、南部不毛の境界にあらゆる困苦を嘗めつくせり。能く之に耐え、能く其報を受たるは、最上の勝利なり。たとひ薩長の天下に要路を占めずと雖ども、人物は空たる地位をもて判ずべきにあらず。今ま、硬骨堅節の男子を多く有するは、其のほまれ也。今ま貞烈克己の賢夫人を多く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

有するは、其の富なり。況んや、將來其の義忠に泣き、其の忍耐に感激するもの百世絶えずんば、會津人士は即はち万古に生くるにあらずや。亦何をか憾み、何をか足らずとせん。

ヘルバルトの母（上）

鷗村

今日の教育をいふもの、殆どヘルバルトを説かざるはなく、彼が主義は、日に其勢力を加へ、如此くんば、教育界遠からずして、彼の獨舞台たらんとするに似たり。彼の名は、ペスタロヂーを壓し、フレエーベルの右に出でんとす。亦盛んなりといふべし。彼のよく、偉名を史乘に垂れ、万邦をして、其高説に伏聽せしむる所以、之を源泉に溯りて、探ぬれば、實に其母氏に在るなり。彼も亦、他の幾多偉大人の如く、賢母の眞教育に由りて、其大を致せり。ヘルバルトが功績偉名は其半ばを割きて、母ルイセ、シユイッテラーの名に歸せざるべからざるなり。

ヨハン、フリドリッヒ、ヘルバルトは、一千七百七十六年五月四日を以て、獨國オルデンブルヒ市に生る。父をトーマス、ゲルハルド、ヘルバルトといひ、代言を業とし、兼て市の參事員たりき。彼は小心其職を盡すに、勉めたりと稱せられども、其思想、常務の外に出でんとを求めず。極言せば、彼は平々凡々の人なりき。母は名を、ルイセ、シユイッテラーといひ、オルデンブルヒの一醫師の娘なりけり。稀有俊異の女流として、其譽れ高く、其夫の平凡なりしに反して、想像力に富み、意志剛く、智力に發達せしを以て、愛の事業、即ち其獨子、ヨハン、フリドリッヒが、初年の教育を行ふに、頗る適當なりき。斯子、嘗て殆ど沸騰せる湯槽中に、落ちたりし結果として、常に羸弱多病なりしかば、母は之を學校に送らず、家庭に於て、教育を授けんと決し、自らウルッエン（後に有名なる牧師ウルッェン）といへる、一俊才を擧げて、其子の自宅教師に聘したり。

ウルッェン、其附托を教育するに當り、思想の明晰判然にして、且接續せんとを、修養するに勉めたりしかば、ヘルバルドが、稟賦の哲學傾向は、之によりて、有力なる刺戟を與へられたり。彼が、一の思想の明瞭なるを得る迄は、他の課業

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を忘却するに至りしとも、其教育法の明快なる、思想を得るに、力を用ゐたるとも、また其哲學思想の發達甚だ亟にして、未だ弱冠して、當年の大家と、議論を上下せしとも、蓋し此ウルツェンか教訓の感化に、よるものといふべし。また母ルイセは、ウルツェンが、教授をなす時に當り、常に其子の傍を離れず、其課業を監督し、之に力を協せしのみならず、其子の進歩に伴ひて、之を導くに、全きを得んが爲、自ら共に希臘語を研究したり、如斯くなりしを以て、彼なほ、穉童にして、他人の思想を、了解、記憶するに、非常の能力を示し、教會にて、聽聞せし説教を、一言の誤謬なくして、繰返し得るばかりなりき。十一歳にして、論理學に入門し、十二歳にして、メタフヒジックスを學び始め、十四歳にして、『人の自由』てふ、一論文を草して、彼が未來の哲學傾向の、端緒を示したり。

青苔地上消殘雨。　綠樹陰前逐晚涼。
露簟清瑩迎夜滑。　風襟蕭灑先秋涼。

文壇

家康老后のおしえ（上）

徳川家康、大政を二代將軍に委れ、駿府に居て天下の形勢を視察す。一と度び江戸に遊び、還りて后ち、將軍の夫人に申し送られたる書左の如し。偉人が老后の教え着々深遠の經驗より發し、而も穿々時の切用に中る。讀む人こゝろして其の秘義を覺るべし。

一筆申入候まつ〳〵日増に暖氣に成候てくらしよく候其程いよ〳〵御無事に若達も息才に候や承度候冬年はゆる〳〵と御目にかゝり悦入候其節は何角御兩所の御世話ども老後の樂に御座候能々此段表へにも賴入候

一　竹國殊の外の成人悦入候それに付先頃其地へ參り候節竹へ附人の事被申付候やうにと申置候定て被申付候半とぞんじ候

一　國事は一躰殊の外發明成生れ付にて重疊の事其御方別て御秘藏候よし左樣に可之有事に候夫に付存寄申入候間能〳〵御心得生立候樣被成候

一　幼少の者利發に候とて立木の儘に育候得ば成人の後氣隨

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

わがまゝ者になり多くは親の申事さえきかぬやうに成候得ば召仕候者の申事は猶以の事に候左候得は後に國郡を治候事は扨置身も立申さぬやうに成申候一躰幼少の節は何事も直成ものに候得ば如何樣に窮屈に育候ても最初よりの仕付次第にて外より存ずる程の大儀にもなく候是を植木にたとへ候えは初二葉にかひ割候節人の產立と同じ事故隨分養育いたし一二年も立枝葉多く成候節添木いたし直に成候やうに結付其内に惡敷枝はかきとり年々右之通り手入致し候得ば成木の後直成よき木に成候人も其通り四五歲よりは添木の人を付置候てあしき枝の我儘に育ぬやうに致し候は後直に能人と成申候幼少の時は育さへ致さばよきと心得我儘に致し置年頃に成急に異見致し候ても我儘のあしき枝計えげり本心本木は失し事故直り不申候是には今以考出し候事有是候三郎出生の節年若にて子とも珍らしく其上ひかいすゆへ育さえすればよきと心得氣のつまり候事は致させず氣儘に育て成人の上急に色々申聞候得共兎角幼少の時行儀作法ゆるやかに捨置親を敬する事を不存いやすく存あれば是故是は何故と申事を不存後には每度申ても聞入不申返て親を

恨み候樣に成行申候て夫にこり申候儘外の子供は幼少より我等前にて行義作法よく仕候御者へ申付置若少しにても不行儀我儘の事は我等前へ出候節每度或は叱り又は是はかやうには致さぬ者ぞと一々申聞候故影日向なく直に育申候第一親をこはく存候得ばつゝしみよく幼少ゟ親に孝行に致候事覺へ申候其上小身者とは違ひ召仕候者の申事を能承り置候樣に申事第一に申聞候事親の有内はつゝしみ候ても親の居ぬ時節に成我儘に之國郡を失ひ候落古へより多く有之候兎角常に側にて召仕候守の者第一孝々と天命と下へ慈悲を掛武家の事幼少より申聞候得ば自然と身持能なり候物に候君臣と申事は定りし事に候得ば君たる者は臣君と心得申事專一のよし我幼少の節安部大嶽每度申聞かせ申候尤臣として君に仕へ候事故如何樣に無理成事をも無是非なり無道の君へも仕へ候得ば夫にてはまさかの時用にたゝぬものにて候兎角上ゟは何事に寄らず慈悲を掛贔負偏頗なく賞罰を正しく臣を君の元と心得候得ばよく候臣ありての大名なれば召仕者無之ては大名のせんはなく候とかく幼少の者には召仕者の申事を能聞候と常に御申聞せ被成候事專一の事に候

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

一人は人を鏡として身を正敷候外はなく候
我儘にて終に我願望の叶し事决て無之候第一我儘にては親をおそれず親に見かぎられ第二親類にうとまれ第三朋友にうとまれ第四召仕へ者にうとまれ第五我儘身願事ことごとく望不叶右五ヶ條の通成行候得ば身をうらみ天道を恨み後にはわつらわ敷心亂るゝ外なく候只幼少より物と自由にならぬ能々心得申度事に候

一大名は惣領は格則次男よりは召仕者同樣に心得候事常々申聞育候時より主人と心得候樣呉々可被申候惣領と次男の威勢つよきは家の亂れの元に候事

一幼少の節萬事おふやうに憎き者の物事まねぬやうに心得候事夫共あまりおふやう過ては返て下の情にくらく慈悲心薄く成申候常々の遊びに國の名さんの事或は大名の家筋家柄の事幷に家來のあれは何の代よりの譜代の者何の節手柄の者の如才にならぬ事共聞覺候故成人の後自然と委く成仕何の節高名等致し候子孫などと咄し致し候へば幼少と家中置行屆申候大名の自身に嗜事と申候事は弓馬第一鎗長刀劍術と心得可申事なくてならぬ事に候

小説

橋松佳話

第六回（上）　花圃女史

松のさかえ

新橋ステーションに人の波うつて箱馬車のきしる音はげしき中に、ガラス越の面かげやつれて、下むきたる婦人は操子、むかひざまに座したるは堯行と堯行の新婦、男なれども一人の妹のなしと思ひ絶にしを目の前にみしうれしさに、一言いひては涙をぬぐふひまより、珍らしげにさしのぞく面の顔見合せては、またともにゑみつゝうちなきぬ、まして後室は玄關にあまたゝび出迎へて、それと車の音を聞しより早聲たてゝうれし泣にふしまろぶ、操子家に立歸りてものかたるを聞ば萬夢のやうにて今こゝにかたるも夢現の境わきがたけれど、船に損所出來て、ものにくだくる樣なりしが、萬たゞ夢にてうちあげられしはガアム島とや、人心地つき島人に助られ半年

あまりの夜と晝を過しゝ後、軍艦の立よりしに助けられての歸路、又他の島に宗平の助かりしを得て、只一人いき甲斐なくも歸たれど、母君兄君におもはぬお面會のうれしさと、今と過にし時をおもひ、かつは心の中にしばしも忘れぬ夫の上をおもふもたゞ〳〵涙なり、宗平は横濱に萬の用事すませて一汽車おくれてかへりおそる〳〵こゝにつどひ、たゞ〳〵おそれ入のみなり、片羽もがれしおし鳥の泣音かなしとなぐさめがたき堯行も、かくてはてじとかたへには、操子をいさめはげまし、かたへには手の及ぶ限りさぐり求むれど、かの時任と瀧本、橋本の三人は死骸もしれがたしといふ、中々にあさましき姿にてみんよりは、いつかはのたのみあるが万一の望みと、操子はこの頃漸いたづらに歎をやめて、よし不運にして橋本からもとゞめぬ底の水なはと消失せぬとも名は萬代にとどめたき會社の保存、これをわがかへぬ操のしるしとせんと兄にも心の中物がたり、今村久をたのみて宗平を主任者とし貿易に從事せさせ、いよ〳〵手びろうなさんとす、操子かく心はかためければ、しのぶ夫のおもかげなつかしく枕うく計なれどひるは雄々しく萬事の處理をうけもち、小才覺ありて役に立べき者と伊豆の會社に橋本つかひし久の弟を呼むかへて、今は遺言となりし橋本の船中の言葉の如く、小笠原島へ人をつけ遣して信天翁の指揮をうけ開拓水產殖產の事共をうけおはせぬ、猶操子父と橋本の遺產は、この擧にのぞみ、何にまれ、世の中にありとある利益の爲には擲たんとの决心、堯行もよしとして、ひろく同志をつのりけり

世の人の善に與し、惡をにくむは、天性のしからしむる所ならめど、操子數多の財產、これらの爲に義捐せんの計畫あるよし、世にきこゆると共に、かく計人は、それらの爲に、身をいるゝものかと、おどろかるゝまで、とみにあなたこなた慈善者、梟雄者いできて、松田家の門前、郵便配夫の出入しげく、操子の召使にても面會したしといひ込者、市をなしけり。操子、それらの人々と一々面接すべきにもあらねば宗平、萬事にぬけめなく、天晴、家令の役目として、數多の男の中にも、年久しき譜代の男にならびて、訪問者の應接引受ぬ。宗平の從弟磯貝天龍、某省の出仕なりしも此亦、事なれたるものなれば、宗平がかたり相手として今村久、廣瀬某などもともに評議に列り、來訪者の所談を可否するの

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

役にあり、おのれは　室深くたれこめて大方の人々には接せざれど、この人々よりきゝとりてその趣意の可とさだまりたるには、あふて物語するものありけり。ある日來りけるは、松田家の菩提所の住持よりの添書、名もかねて聞しりし某律師、操子これには自身應接せではならじと出むかふに、あたまにおほへる白髮、ふさ〳〵として髯につき、赤ら顏、眼圓に、眉長く、たれて、鼻ひくゝ、躰は大からなれど、瘠肉なり、黒染の夜の袖の下に數珠つまぐり、袈裟も香染の質素なるをかけたるさま、現に老弱男女の歸依渇仰すと聞しも、實に理なり、と操子心の中に感じて、茶などすゝむるに、念珠つまぐりつゝ、とき出すは佛敎擴張の目論見あれど、うれはしきは、當今異敎を信ずるの族も、有、それならぬも、祖先の法事もつと〳〵には行はず、輕薄に流れて、己一人の事ばかりをはかる輩多く、佛道次第〳〵におとろへ行んとするを、こゝに不思議なるは、太西の國々にては却て東洋哲學とこれを好し、佛の法、深く存する所を探り知らんとす、實に〳〵我輩の奮起すべき時期とおもはるゝに、我國人、心を用ゐねば資本に事かきて、道をひろむる暇なし、いかでつたへ承るごとくば、力をかりまをしたしといふに、操子もうちよろこびて、誠によきおぼし立、植民地などはことに宗敎を要し候ものとか、それらの所に布敎者、派遣せらるゝならば、よろしかるべし、妾も應分の御助力は いたしたしとこた ふるに、あつく禮して立歸ぬ。

この律師の弟子とて、まだわかき僧其後師命もて來り、宗平までいひ入るゝ事しば〳〵なりしが磯貝天龍、其席にありて、よく〳〵きけばかつて同じ小學校にありしもの、序よしと律師の素生、聞たゞすに、佛道もひろくはおさめず、元は賣卜者なりしがふとせし事より運むきて、今はあのやうに尊敬さらるれど、家には妻子あり、妾までもあり、海外布敎などいひ立、貴顯かたよりの寄附などありしも、其金今はいかにせしか、中々に生姜主義、泪に遣ひなくすたちならず、大方は人に貸し附、利殖などを計りおらん、かゝる不法の人物なれど、辯舌と風采とのよきに、人々の尊敬を受るをかしさ、我もその内幕をしりては、愛想もつき、ほどなく其門下を脱する心得なりと、心やすさのまゝの内密ばなしを、きく操子はうち驚き、其の人の信じがたきをおもへば、かへす〳〵もわがおも

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ひ立し事の、たやすからぬを知り、かるはづみなることとして、父の遺産を、まいす、かたりのはらこやさん料とせんにはくやしからんと、なほも宗平等にときさとして、萬に心をくばらしめぬ。

その後又磯貝が相識る醫師より紹介せし産婆、これも女同士のこゝろおきなく、操子自から出てはなせば、年の頃は四十餘り、でつぷりとふとりたけ低く、黒繻子のはゞせまき帶、しかとしめ、黒つばき衣服着し、人から賤しからぬ女、もとは醫師の妻にて、夫におくれしより、おもひ立ての今の生活、行屆かぬながらも、生徒をも養ふまでにいたれり、この業は別に要する機械もなく、たゞ手練一ツのものなれば、貧民の婦女の生業としては、適當なりとおもへば、その練習の地として、一の病院を設立し、專ら慈善を主として、貧窮の妊婦をこゝにいれて、産育せしめたらんには、一舉して兩得するの便宜あり、とはこゝろづきたるも、その資本に事をかきて志を果す能はず、何とも御盡力被下たし、とたのむに操子はよろこび、なほも其方法をもかたり合おもひつきしふしは、忠告して、若干の費用を義捐して、其病院建築の創始を資けぬ。其他來たる人々には、我邦の婦女子の男子に賤蔑せらるるを憤り、其品位を高めんため、或は雜誌は發刊し、或は集會を催し、同志の婦人打こぞりて、演說を試み、團躰を組織して、文學に、美術に、手藝に、專ら婦女獨立の氣風を養生して男子の庇護を頼ましめざらんやうとの企ある集會といふの會長、某女史、操子にあひて、懸河の辨滔々と、歐米女子の故事とも談ならべて、矯風正俗の業は、女子の手にあるべき者なる事などゝ息もつかずのべつけて、是非ともに義捐あるべしと强るがことく、いひ出しぬ。操子そのいひさまの片腹いたく覺えしも、まんざら世の爲ならぬよしにもあらねば、よきほどの金圓、とり出で婦女子の美徳は優美てふにあれば、高談雄辨麁放自から容ぶべきにあるまじ、女徳を奬んとして、女徳を損するとなきこそ願はしけれと忠告せり。

こゝにだに光りさやけき秋の月、
雲の上こそ思ひやらるれ。

君なくてわれたる宿の板間より、
月のもるにも袖はぬれけり。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

隨感

○普魯士亞獨立戰爭に於ける 哲學者及び大牧師

ナポレヲン一世、普魯士亞に大敗し、天下の激昂、火の新たに燃え揚らんとするが如し。プロシア王フレデリッキ、ウイリアム第三世、檄して「吾國民」を招く。時は、名高き千八百十三年、五月二十日なり。

是より先き、哲學者ヨハン、ゴットリーブ、フヒヒテ、伯林大學に教授たり。此日、彼が深邃靜遠なる講義を聽かんとして集まりたる大學々生に面し、沈着にして溫雅なる哲學者は立てり。例の如く高貴なる靜肅をもて口を開き、極めて落着きたる雄辯を以て、辭ばを送輸せしが、少焉にして烈火、舌端より燃え、生氣天外より下り、辯者は、慨然として暴力の壓制を痛論せり。時に校外の軍鼓いよ〱高し、辯者益す慷歎して、「此暴力を追ひ拂ふは、國民の義務なり。此國の自由を保護するは、義人の責任なり」と絕叫して、感慨激甚、終に左の決句を吐けり、

吾が此の講義は、戰ひの終る迄で中止すべし。吾等は一の自由國に於て再たび是を續くるとを得ん。否らざれば、其自由を恢復するが爲めに死せん。

堂內の學生皆な叫喚す。拍手百雷の如し。地を履む、ひゞき校外の鼓聲を沒す。時に喇叭を聞く、日耳曼男子たれか起たざる。哲學者フヒヒテは壇を下れり。群集の間を走れり。將に出軍せんとする義勇兵の隊中に入りたり。彼は此如くして出軍し、遂に此の軍さに死せり。

同時伯林大學の神學教授は、牧師シユライエルマツヘルなりき。大學中學の書生連合して義勇軍をつくり、整服を着し、軍器を裝ほひ、將にブレスラウに向つて發せんとして、首途此の大牧師に請ふらく、願はくは一塲の說教をたまへ、亦ともに晩餐の式に列せしめ玉へと。只見る、ホーリー、ツリニチー教會堂の門前、門內、壁后、壁側、數百の小銃、暫らく殺氣をころして立てり。古曲、"In all my Acts" の聖歌うたはれ、短かき祈禱捧げられし后ち、聖なるシユライエルマツ

ヘルは、聖所の壇上に立てり。

丈ひくゝ、風采あがらずと雖ども、高貴なる相貌は、深き智慧をもてかゝやぎ、明晰澄徹の淸き聲は、溢るゝ計りの聽衆が此方よりかなたに凛々として鳴りひゞけり。聖淨なる熱意、心の底より湧き、一句、一語、聽く人の胸に徹し、雄辯の滿潮は、各人の心を載せて打上げたり。大膽無容赦に吾國民の短所罪惡を暴露し來るときは、宛から陳雷疾風の天より落るが如し。一と度び悔改をうながして淸き思ひを天父に捧げよと說き來れば、忽然天外より立琴の美なる調べを聞ける心地す。牧師は、終に滿胸の熱情を傾盡せり。彼の出軍すべき靑年を見たり、更に之を送らんとして來りし母を見たり。彼は泣いて感謝せり、あゝ〳〵斯る男兒を生みし其胎は幸わひなる哉、かゝる赤兒に乳かひし其胸は祝すべき哉と。

エホバ斯く言ひ玉ふ、大凡そ人をたのみ肉を其臂とし心にエホバを離るゝ人は詛はるべし、彼は荒野に棄られたる者の如くならん、彼は善き事の來るを見ず、荒野の燥きたる所ろ、鹽ある所ろ、人の住まざる地に居らん。大凡そエホバをたのみ、エホバを其恃とする人は福なり、彼は水の傍に植たる樹の如くならん、其根を河にのべ、炎熱きたるも恐るゝ所ろなし、其葉は靑く、大旱の年にも憂へずして絕えず果を結ぶべし。十七章、五—八

われ急かに民あるひは國を拔くべし敗るべし滅ぼすべしと言ふとあらんに、もし我いひし所の國その惡を離れなばわれ之に災を降さんと思ひしとを悔ん。我また急かに民あるひは國を立つべし植うべしと言ふとあらんに、もし其國わが目に惡しく見ゆる所の事を行ひ、わが聲に遵はずば、我これに福祉を賜へんと言ひしとを悔ん。十八章七—一〇

との豫言者エレミヤが教を引き、自由の爲めの戰に對する一國民の義務を闡敎し、行くものは野に戰ふべし、留まるものは、矯風に戰かふべしと慨言したり、即はち亦た大牧師シユライエルマツヘルなり。

〰〰〰〰〰〰〰

東波

昨夜雨鳴渠、曉來風裂目、蕭然欲秋意、谿水淸可啜、
環城三十里、所々曾佳絕、浦蓮浩如海、時見舟一葉、
此間眞避世、靑蒻低白髮、相逢欲相問、已逐驚鷗沒、

書架

○夏の家庭

家庭叢書の第二卷は、時節がら恰好の著書なり。文章、思ひ付き、挿畫、例の如く快新なり。たゞあやしきは、男兒青年などの爲めに說くこと、多きかと思はるゝことなり。午睡の後ちザンブと水をかぶれなどの方法、所々に多ければ也。

○天然と人

何んぞ其題名の快ちよきや、夏に際して讀まざる可らざる心地す。何れも、一度は見たるものゝ編輯に過ぎざれど、國民新聞に出し所云る傍觀傍聽記が、德富君の筆に成りしとは意はざりき。之のみ、眼を刮つて新らしく再讀し、今尙ほ鮮味を感ずるなり。

○隣の女　　撫泉

美妙の言文一致すでに忘られんとして、紅葉すなはち之を興す。輕妙、雅趣、かくの如し、誰か此の言文を甘たるしといはん。當年の新事業、いまや初めて紅葉に其譽れを分つ。事は則はち尋常多く有り得べきの事。情はこれ凡俗すべて免かれがたきの情。奇變あるにあらず、矯激あるにあらず、波瀾高きにあらず、風嵐あらきにあらず、正さに是れ平々低々の流、小波さゞめき、軟風、葦をゆるぐに過ぎずして、而も讀者を惱殺し、悶殺せしむるは、巧妙にあらずして何ぞ。麗語ありて、險語なく、艶詞ありて、淫詞なし。一見すれば、平易、人に近くして錬ること少なきかを疑はしむ、則はちこれ其の大錬のある所ろ。紅葉の名を成すこと、由緣あり。

あはれむべし、粕壁讓。弄笛、汝が魂を慰するに足らず、璧は、宙空にさまよふを嫌ひて、肉に耽らざれば休まず。金剛石の指環、死後にのこれども、指端また風塵を曜らするの妙なし。惡女、依然として麗はしく、秘密はたゞ小說家の翻弄となりぬ。

あゝ、精勤一日も休まずして、一夜乍ち死し。警吏夜侵して、あかしを消す。美男子、外姿に秘戀あるを知らず。美人

凛然たる容色に、無限の毒をつゝむ。憶ふ、かの夜、萌黄の夜具風呂敷を負へるの人、隅田橋邊に立つて、恐怖し、戰慄し、或ひは美形に伴はれて、一物を投下するの地を撰びやしけん。堅き約束、五千圓の持參、恍として夢の如し。浮足輕心の手、物を投下し了せんとして、身はともに水中にあり。咄、毒婦。人生の秘義、一刹那にあり。あゝ美形、蒼白の白きや加へたる、節を賣るの自由や増したる。白面の悪鬼、到底大率ねかくの如し。

時事

皇后宮陛下の御おしえ

近き頃の御事なり。皇后宮陛下、華族女學校に行啓あり、細川校長を御前に招かせられ、直ちに近侍に御言葉ありて、之を校長に傳へしめ玉ふらく。古しへより敎へたる例しにてはあれど、取わけ我國は下、上にならうこと多し。左れば、この國の女風を改ためんには、先以て上流社會の女なの風儀

を清く潔よくせんと專一なるに、方今のありさま歎くべきもの多くあり。こゝを以て華族女學校を設け、率先して上流に立つ婦人の德義を改ためしめんとすると年すでに久し。さきに汝を撰みて此の校の長たらしむると、從來の經驗淺からじと惟ひてなり。宜しくわが心を躰して、一としほ勵み敎育すべしとて、例を古今にひき、感慨を當世にもらし玉ひて、いと〱長き御ことのりあり。恐る〱御姿を拜しまつれば、温たる聖采、一道の光を放ち、高音凛として、人の腸に徹す。かくの如き、御敎訓、斯の如き、御感慨を露はしたまふ御心のうちを推し奉れば、恐れながら生平の御養積、御觀察、いくそばくぞと、伺がふ人々、恐懼の思ひに堪へざりけり。校長はひたすらに戰慄し、御命を承はるにつけて、臣、及ばざるを思ひ、更らに恐懼の至にたへずと申上げければ、此度は御前ちかく招かせられて、直ちに御なぐさめの御言葉あり、責は汝にあれども、事はすべての敎員がともに盡すべきものなり、互ひに一和して、わが心を成せよと、いともねもごろなる御はげましあり。至れり盡せる御なさけ、感泣せぬものなかりけり。是よりして、衣服質素の校達もあり、校内一ときは引し

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

まり、人々勇み立つてぞ見えにける。かつて某侍從の言へらく、皇后宮陛下、女子教育に御心をよせ玉ふ御事の切なるは、臣等が言をもてうつすべからず、そも〳〵何如にして、人々其大御心を知り奉まつるに至らんかと。嗚呼、われら、天の高きに達すべからざるも、月を池中にながむるとを得べし、誠心滿力、その水を清めずんば、如何にして聖なる今日の御代に報ひ奉つるとを得べけん。

○必勝の戰、既捷の戰

◎名正し、地の利善し、兵の和あり、國民一に歸す。今回の戰の如き、古來なき所ろ。日洲安くんぞ大ひに揚らずして可ならんや。

◎曠日七十日、師を出して戰なきと既に久し、危機幾百髮、風説幾千流。左れど、之を以て無益とするとなかれ。此事ありてより二月半、國民は宛然五年の教育を受けたり、十年の説教を聞きたり。戰爭の人に教ゆると、深且つ切なる哉。

◎豊島の一小戰は、やゝ鬱をはらしたり。左れど安くんぞ大事とするに足らん。たゞ半島の人、喫驚、天に陳謝す、日本の力如此しと。改革を了すると速やきを得たりけん。

◎大日本の伸張には、一大決戰なくんばある可らず。一大決戰とは、一大決死を含む。義に倒れて止まざる底の決意あらずんば、茲に一大決戰あるとなし。一大決戰なくして安くんぞ大國を建つるを得ん。

◎われをして不吉の言を爲すものとなすとなかれ。吾輩は必らずしも、有形の勝敗を以て最後の喜憂となすとなし。もし大日本、義の爲めに戰かひ、自由の爲に戰かひ、文明の爲に戰はんか、たとひ万々一半の不幸ありて、暫らく挫折するとあるも、是れ即はち大勝利、大成功の基本たり。吾輩何をか疑はん。

◎たゞ小勝に誇らしむると勿れ、小勝に誇るものは、豈に小敗に挫けずや。大日本、義の爲めに立つの日、これ凱旋の日なり。何んぞ必らずしも有形の跡を未然の後に疑懼せんとするや。

○閔氏及支那人

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

請ふ流罪にある閔氏を迎へん。在留せる支那人を厚遇せん。願はくは、日本人民の大俠を示さん、壯士小恐に激して、國家のほまれを汚すとなかれ。

○王子孤女學院

孤女學院の會計報告は、本號の附錄によりて見らるべし、此の間、院内に病者多く、出費格外に夥たゞしかりしかば、近來財政きわめて困るしと聞く。こゝに、先七月の如きは、如何にして月を越し玉ひけんと思はるゝほどなり。四方の仁人、この沈として廣告せざる孤女學院を思へ。こゝに、同胞姉妹は、日夜に此院の維持方を忘るべからず。見よ、幾多の孤女は、元來諸君が救濟すべきものにあらずや、而して孤女學院は、即はち諸君に代つて其務めを盡すものにあらずや。

○女子夏季學校

第二回女子夏季學校は、東京府下、青山英和女學校に於て開設さるべかりしに、該校地震のために破損し、修繕意外に手重もとなりしかば、俄かに場を横濱山手フェリス和英女學校にうつすとなりぬ。教場は去年の舊知己なり、此校は第二の繼續なり、八月三十日、惠然として四方より來會せよ。

○塚本ふぢ女史

ことし米國ウィルソン女子大學を卒業したる塚本ふぢ女史は、專ぱら文學歷史を修め、傍はら植物學に精はしく、學位はB.A.及びB.S.の二つを得られたり。近日歸朝の由に聞きたるが、其の彼地を出發せんとするに臨み、突然、ヒラデルヒアの高等大學院より、學業の優等を賞し特待生として校費入學を許すべき旨申し出られしかば、教員知人の勸奬切なるにより遂に一年間滯留入學の事となりしよし。

○成瀨仁藏氏…大坂梅花女學校

成瀨仁藏氏大坂梅花女學校に長たりてより、諸種の改良を案じ、こゝに新規則を發して其梗概を示めせり。中に、注目すべきは、最初に其校敎育の要領なるものを記るし、敎授の目的は獨立研究の實力を得せしむるに在り、故に專ぱら觀察經驗讀書及び實習等に因り自家の研究を奬勵すなどの說あり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

又曰く、

家政部に商業科を置く

教育躰操、遊戯躰操、及び容儀躰操の三種を用ゆ

寄宿生は各自其責任を分擔し自から守り自から治むべし

校母の指揮により土曜日より日曜日にかけ模範たるべき家庭に遣はし其家風に習はしむるとあるべし

○ウイラード歸らんとす

近着の米國雜誌は、ウイラードが病癒えて大英國より歸らんとするを歡迎せんとする準備の記事にみてり。さかむなる哉、ウイラードの德望や。

つれ〴〵草

筆影錄（二）

蕉雨生

○記者箴

筆を詞壇にとりて、品藻を文林に托せんとするもの、新聞雜誌の上に國家社會の事を論議して、公衆の耳目たらんといふもの、往々にして筆鋒を愼まずして、人を傷け、社會を賊つて、恬然知らざるが如くす、今日の記者の細心謹直ならざる、時には正義の人に貶謫して、耻づる處なく、恐るゝ處なし。是を非とし、非を是とし、正を歪げ、理を敝るは、今日の新聞雜誌上多く見る處ならずや。甚しきは漫に人を呼んで、亂臣賊子といひ、狂漢惡徒と稱し、不正不義と唱へ、或は又害意を含み、營利を志して、他の秘密を發き、ゆすりをなすものさへあり。匿名の下、假用し來りたる編輯人の記名の下に隱伏して、毒筆を逞しうするに、責なきが如く思へり。吁何ぞ記者輩の筆鋒に謹愼なること少きや。一人の毒舌よく人を陷れ、國を滅ぼすとせば、一枚の毒筆のなす處、其害の測られざるものあらん。筆を詞林にとりて、文壇に立つ記者よ。汝曹正義を愛せんには、細心顧慮して其筆端に謹直なれ。予今汝等の爲に贈るに、文昌皇帝が惜字眞銓十二則を以てせん。乞ふ之を以て汝曹が坐右の銘となし、筆をとらんとするに先だち、常に之を三誦して、小心翼々たるとあれ。

文昌皇帝惜字眞銓十二則

筆を下して、人の性命に關するものあらは、此字や惜むべし。

筆を下して、人の名節に關するものあらば、此字や惜むべし。

筆を下して、人の功名に關するものあらば、此字や惜むべし。

筆を下して、人の閨閫陰事及び離婚等に關するものあらは、此字や惜むべし。

筆を下して、人の骨肉を離間するものあらば、此字や惜む可し。

筆を下して、人を謀りて自ら肥え、人を傾けて活計するものあらば、此字や惜むべし。

筆を下して、高年を淩ぎ、幼弱を欺く者あらば、此字や惜むべし。

筆を下して、私懷を挾み、故きを隙し、眞道を賣り、人の成謀を毀るものあらば、此字や惜む可し。

筆を下して、人を唆かして怨を搆へ、人に代りて詞を架するものあらば、此字や惜むべし。

筆を下して、意を恣にして、是非を顚倒し、人をして寃を含ましむるものあらば此字や惜むべし。

筆を下して、謠詞黷曲或は詩札を作りて、他人を仙笑するものあらば、此字やをしむべし。

筆を下して、人の忌諱を刺りて、終身恨を飲ましむ者あらば、此字や惜むべし。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時報

◎學校、敎育

○兵庫縣に於ける裁縫專修科の設置　同縣にて女子敎育普及の爲め裁縫專修科を設置するとなし此程縣令第五十六號を以て左の規定をなしたり

小學校に裁縫專修科を設け尋常小學科卒業以上の女兒にして高等小學校に入る能はさるもの若くは學齡を過きたる女兒に限り入學せしむることを得

土地の情況に依りては裁縫科の外修身容儀等を加ふることを得

裁縫專修科を設置又は廢止せんとするときは市町村立小學校に就きては其市町村に於て私立小學校に就ては其設立者に於て修業年限敎科の課程及每週敎授時間を定めんとするときは市町村立小學校に就きては其市參事會又は町村長に於て私立小學校に就きては其設立者に於て縣知事の許可を受くべし

裁縫專修科設置の許可を請はんとするときは左の取調書を添ふべし

一女兒の員數

一敎員の數但別に敎員を置かざるときは本科女兒の數及其受持の關係等を記すべし

一敎室の坪數及本科各敎室との關係を記したる全校舍の略圖

一授業料の額

一設置の爲に要すべき費額但通常費と臨時費とを區別し目を內譯すべし

○仙臺高等女學校の設置　仙臺市敎育會にては中央部より諮問せられし縣立高等女學校設置の事を當局者に建議する件に付去る二十三日の同會例會に於て討議せしに其規則の細目に付一二の議論起りしも全躰の旨趣に就ては一の異議者なく一致の同意を以て諮問案を可決したりと

◎片々

○女子慈善館設立の主旨　女子慈善館設立に關しては曾て本誌上に報ぜしが設立有志者が世の博愛義俠なる兄姉に訴へたる文左の如し

社會的事業として、最も憂ふべきもの、醜業婦問題の最も憂ふべきより憂ふへきは莫く、之を救濟するに最も困難なるもの、亦醜業婦問題の最も困難なるより、困難なるは莫し。彼等は耻を世界到る所に曝らして、我が國民の体面を害するのみならず國家の元氣を消耗し、社會の不健全、不道德、不經濟、不名譽の因由をなし、罪惡の媒介をなすこと、今これを說述するまでもあらず、故に今日の急務は、已に其事の如何に耻辱にして、如何に不良なるかを議し、如何に之を救濟すべきを論するのみに止らずして、如何に之が救濟を實事にすべきかを講ずるに在り。我等が此の最も慚ぢ、且つ賤しむへき境涯に陷らんとし、及び已に陷りたるを悔ゆるものゝ爲めに、こゝに彼等が一の職業學校たる女子慈愛館を設立せんと欲するもの、蓋し偶然にあらざるなり。

女子慈善館は、彼等を正業に導くべく、養蠶製絲裁縫、刺繡、造花、若くは菓實の植付け等の如き、婦人にしてなし得らるべき業務を授け、且つ其販路を開き、以て彼等を自活の途に就かしめんとするものなり。

幸に已に之が贊成の意を表するものあり。且つ我が婦人矯風會の事務所建築費として有志者の寄附を得たるもの、數百金あるを以て、則ち目下の急務たる此の醜業婦の爲めの職業學校と將來の矯風會事務所と倂なすべき幾多の矯風慈善事業とに供すべく、城北大久保を擇びて已に一千八百圓の地を見付けたり。然れども我等が今こゝに手にしたる所は未だ數百金に過ぎずして以て事業の成功を見るに足らず。

天下の博愛義俠なる兄姉よ、希くば我等が志の在る所を察し我等が微力を助け以て一日も早く此の矯風事業の實行を見せしめよ。獨り我等が幸のみにあらざるべし

○奈良縣知事の風紀取締　今の古澤氏赴任以來風紀取締頗る嚴重にて同地の遊郭を始め各料理店旅人宿等にては之れが爲め頗る閉口し居ると云ふ

○大日本婦人有志會　同會は今回の朝鮮事件に就き軍隊の粉骨を慰問し日本婦人の赤誠を發揮せんとて組織したるものにて事務所は大坂西區江戶堀北通一丁目旭形龜太郎方にあり專ら渡韓軍隊慰問義捐金の募集を事とする由

○佛敎女流敎育會　尾州知多郡有松町の祇園寺住職荒谷性顯及び曹洞沙門小島貫道の兩氏發起にて今回同町に佛敎女流敎育會なる團躰を組織し去廿日其發會式をしたり

◎日本赤十字社錄事

○寄付金　今回朝鮮事件に關し本社が之に對する事業費の內寄付金の申出でたるもの左の如し

一金拾圓	兵庫縣正社員	小林房太郎
一金參拾圓	静岡縣正社員	松永安彦
一金參圓	同	松永マス
一金同	同	松永トシ
一金同	同	松永正名
一金參圓	静岡縣正社員	牧田佐重郎
一金參圓	同	吉澤秋三
一金同	同	松永晴太郎
一金同	同	深井讓
一金參圓	静岡縣正社員	面尾與三郎
一金五拾錢	同	望月豊太郎
一金壹圓	同	時田直吉
一金同	同	笹山信風
一金同	同	岩科健義
一金同	同	水野隆一郎
一金同	同	橫割純宗
一金貳圓	静岡縣	牧田克已
一金拾圓	埼玉縣正社員	大島喜三沼

計金七拾參圓五拾錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

孤女學院報告

明治廿六年第十二月分

寄附金之部

金壹圓 東京 猪俣吉平氏
金四拾七錢 仝 傳道女館
仝壹圓〇壹錢 仝 婦人老人會
仝六圓(クリスマス用)仝 ミス、ソールス
仝五拾錢 仝 木村ヒサ子
仝貳拾錢 杉本角太郎氏
仝貳拾錢 仝 杉本トキ子
仝三拾錢 松田マス子
仝拾錢 藤田眞興氏
仝拾錢 井上運作氏
仝三拾錢 渡邊マツ子
仝五拾錢 東京 北多摩教會信施金
仝四拾錢 仝 岡村豐三郎氏
仝六拾錢 王子 平野カズ子
仝五拾錢 仝 佐保田ヨシ子
仝拾錢 内藤講義所神山平氏
仝拾錢 仝 神山平左衛門氏
仝拾錢 大野助次郎氏
仝五圓 東京 監督マキム氏
仝貳拾圓〇六錢 仝 ミスウ井リヤムソン
仝拾六圓 雜收入金
仝四拾四圓貳拾五錢 米國ニューヨーク昇天教會婦人會
仝五拾錢 伯耆 松井百藏氏
金壹圓 東京 伊藤喜美榮子
仝三圓 東京駿河臺英和女學校王女會
仝壹圓 仝女學校内 ミス、ホイツトマン
仝壹圓 仝女學校ミス、キダ
仝壹圓(クリスマス用)東京 ミセス、コツクス
仝拾錢(仝) 東京三一神學校川名篤三郎氏
仝壹圓(仝) 岡山 岡山孤兒院
仝五圓 東京 紅葉會
仝五圓 仝 無名氏
金貳圓拾六錢 横濱内田町美普教會婦人會

合計金百拾八圓五拾五錢

支出之部

金三拾四圓三拾八錢三厘 米代
仝六圓〇壹錢六厘 肉野菜類
仝九圓四拾四錢壹厘 味噌醬油炭薪油
仝六圓拾五錢九厘 器具
仝三圓九拾貳錢五厘 教育費
仝拾壹圓貳拾五錢壹厘 病人費
仝拾圓八拾四錢 修繕費
仝七圓五拾錢 給料及手當金
仝壹圓三拾四錢 郵税及新聞代
仝三圓八拾五錢 印刷代
仝貳圓八拾五錢五厘 運賃及車代
仝五圓三拾八錢九厘 クリスマス費用
仝壹圓五拾壹錢貳厘 蠟燭石鹸其他消耗品
仝四拾錢 帳簿代
金壹圓拾貳錢五厘 履物代
仝貳拾貳錢五厘 墓地費
仝三圓三拾七錢 乳兒牛乳代

合計金百九圓五拾七錢七厘

明治廿六年第十二月分決算表

金八錢六厘五毛 十一月ヨリ越高
金百拾八圓五拾五錢 十二月分寄附金高
合計金百拾八圓六拾三錢六厘五毛
金百九圓五拾七錢七厘 十二月分支出高
差引殘金八圓九拾七錢三厘 越高

第十二月分寄附物品

一袖ナシ四枚 東京婦人老人會 德富氏
一袷壹枚 仝會 中島眞子
一袷一、足袋三、袖二、單衣地一 仝會 大倉氏
一大根漬及醬油各一樽 東京 井上榮次郎氏
一薩摩芋壹俵 河越 柳川ヤス子
一小兒聖經問答壹冊 東京 根岸由太郎氏
一コンデンス、ミルク貳鑵 横濱 木脇園子
一衣類三枚帽子一 仝 眞友會
一單衣一、袖ナシ一、腰卷一、手袋三、花笄一、髮掛一、カード二十八、玩具數十 駿河臺英和女學校内 増崎ナツキ子
一蜜柑二簏 東京 三輪信太郎氏
一蜜柑一箱 東京 井上榮次郎氏
一蜜柑二箱 王子 藤本氏
一飯櫃二、箸箱六、丼六、雪平一、小皿百十三、茶碗二十八、鉢三、箱一、土瓶七各一 明治女學校
一蜜柑二箱菓子一箱 東京 アムブラー氏
一鷄卵下駄筆紙類 東京 ミス、ゲツプ
一煎餅二袋 王子 無名氏
一岡山孤兒院月報 岡山孤兒院
一女學雜誌、評論、信仰之友、禁酒雜誌、婦人矯風雜誌 各社惠贈
一護教 毎號 青山 中島虎象氏
一わらべ毎號六部づゝ 東京 無名氏

明治廿六年第十二月分實業部報告

一金拾三圓八拾二錢五厘五毛 十一月ヨリ越高
一仝四拾貳圓貳拾八錢九厘 十二月分賣上高
合計金五拾六圓拾壹錢四厘五毛
一金三拾六圓五拾四錢 器械及原料品買入代
差引殘金拾九圓五拾七錢四厘五毛 越高

明治廿七年第一月分報告

寄附金之部

金五拾錢 仙台 布施淡氏
仝壹圓 群馬 吉村隆高氏
仝壹圓 東京 小西信八氏
仝三拾圓 東京 監督マキム氏
仝廿貳錢 仝 傳道女館
仝貳拾錢 北多摩 中島藤助氏
仝貳圓五拾錢 京都 聖公會日曜學校
仝壹圓 佐渡 高橋ヒサノ子
金壹圓 東京 渡邊増田兩氏
金壹圓 東京 宮原要吉氏
金貳拾五錢 高崎 高崎講義所信施金
金拾錢 埼玉 市川清彌氏
金拾圓 横濱 無名氏
金八圓 米國 監督ウ井リヤムス氏
金五圓四拾錢 王子 無名氏
金七圓 物品賣却代

合計金六拾九圓拾七錢

支出之部

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一金貳拾四圓三拾九錢二厘　米代
金三圓五拾八錢七厘　肉野菜類
金九圓拾六錢九厘　味噌醤油炭薪油
金壹圓三拾錢八厘　器具代
金四圓七十四錢三厘　教育費
金七圓五拾錢　給料及手當金
金貳拾圓四拾錢　病人費
金壹圓二拾錢　郵税
金三拾八錢五厘　新聞及帳簿代
金貳圓貳拾九錢　運賃車代
金八拾六錢五厘　附木其他消耗品
金三拾壹錢　綿類
金八拾錢　印形及肉代
金七拾錢　植木代
合計金七拾八圓〇四錢九厘

第一月分收支决算表

一金八圓九拾七錢三厘　前年度ヨリ越高
一金六拾九圓拾七錢　一月分寄附金高
合計金七拾八圓拾四錢三厘
一金七拾八圓〇四錢九厘　一月分支出高
差引殘金九錢四厘　越高

一月分寄附物品

一足袋二十足　東京　婦人老人會
一鷄卵一箱　仝　井上榮次郎氏
一蜜柑一箱　仝　監督マキム氏
一旅路之慰及喜之音十八册　仝　女學雜誌社
一少年文學一册　三一神學校無名氏
一信者への贈物三册　仝　無名氏
一女學雜誌、評論、信仰之友、禁酒雜誌、婦人矯風雜誌、　各社惠贈
一護教毎號　青山　中島虎象氏
一わらべ六部づゝ　東京　無名氏

第一月分實業部報告

一金拾九圓五拾七錢四厘五毛　前年度ヨリ越高
一金拾九圓三拾九錢八厘　一月分賣上高
合計金三拾八圓九拾七錢貳厘五毛
一金貳拾六圓七拾壹錢　原料品買入代
差引殘金拾貳圓貳拾六錢貳厘五毛　越高

第二月分報告

寄附金之部

一金五拾圓　東京　監督マキム氏
一仝壹圓　東京　クリストリーザ氏
仝四拾五錢　東京第二醫院看護婦有志諸氏
仝壹圓　仝　婦人老人會
仝貳圓　靜岡　靜岡女學校王女會
仝拾錢　仝　仝校仝會員某氏
仝貳十錢　仝　傳道女館
仝貳圓拾三錢六厘　山口　日本基督婦人慈善會
仝貳拾錢　北多摩　岡村豊三郎氏
仝六圓九拾錢　米國ヴアルデニヤテルソンパリシ
仝拾三圓四拾三錢　仝國仝州サンダース氏
仝壹圓貳拾錢　高知　婦人慈善會
仝貳圓　前橋　龜山氏
仝拾圓　東京　監督マキム氏
仝貳圓　前橋高崎　教會信施金
仝壹圓　東京　ザエフヘリース氏
仝三拾八圓貳拾錢　東京　築地外國婦人會
仝五圓　東京　ミス、ペリー
合計金百三拾六圓八拾壹錢六厘

第二月分支出之部

金貳拾七圓七拾四錢　米代
仝五圓八拾九錢壹厘　肉野菜代
仝貳圓六十八錢六厘　味噌醤油鹽類
仝拾四圓拾貳錢　炭薪油類
仝三圓九拾四錢五厘　器具代
仝壹圓七拾六錢　教育費
仝三拾六圓三拾五錢壹厘　病人費
金拾三圓四拾三錢貳厘　埋葬費及墓地代
仝壹圓〇八錢　郵税電報料及新聞代
仝九圓五拾錢　給料及手當金
仝七圓五拾壹錢　夜具買入代
仝壹圓〇三錢　運賃及車代
仝九拾五錢　紙類
仝壹圓四拾六錢　履物代
仝壹圓四拾九錢　消耗品
仝貳圓四拾錢　乳兒牛乳代
合計金百三拾壹圓三拾錢五厘

第二月分收支决算表

一金百三拾六圓八拾壹錢六厘　第二月分寄附金
一仝九錢四厘　前月分越高
合計金百三拾六圓九拾壹錢
一金百三拾壹圓三拾錢五厘　第二月分支出高
差引殘金五圓六拾錢五厘　越高

第二月分寄附物品之部

一習字帖三十冊　東京　川口嘉氏
一信者への贈物六册　東京　無名氏
一聖經問答三册　仝　監督マキム氏
一わらべ七部　仝　無名氏
一女學雜誌評論禁酒雜誌信仰之友婦人矯風雜誌　各社惠贈
一護教毎號　仝　中島虎象氏
一鰹節　東京　小宮氏
一蜜柑一箱　仝　監督マキム氏
一菓子二箱　長友タゞ子

第二月分實業部報告

一金拾貳圓二拾六錢二厘五毛　先月ヨリ越高
一仝拾七圓九拾六錢七厘　二月分收入高
合計金三拾圓二拾貳錢九厘五毛
一金廿六圓八拾三錢七厘　造花器械買入其他費用
差引殘金三圓三拾九錢二厘五毛　越高

第三月分報告

寄附金之部

一金貳拾八圓四拾壹錢　東京築地外國婦人會
一仝四拾圓　米國　有志者
一仝拾圓　東京　メールス孃
一仝拾壹圓　横濱　無名氏
一仝三圓　山梨　英和女學校王女會
一仝貳圓貳拾錢　仝　仝校有志諸氏
一仝三拾壹錢　東京　傳道女館
一仝壹圓　仝　コックス氏
一仝壹圓四十錢　仝　無名氏
一仝壹圓　京都　婦人會
一仝五錢　仝　宮本夫人
一仝貳錢　仝　宮本氏
一仝壹圓　和歌山　橋爪操子
一仝五圓　三重　丹羽貴子
一仝壹圓　伊豆　間宮ハマ子
一仝壹圓　東京　ミス、ゲツブ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一金五圓　東京　無名氏
一仝九錢　東京　岡田金澤兩氏
一仝九拾貳圓三拾八錢六厘　無名氏
合計金貳百三圓八拾六錢六厘

第三月分支出之部

一金三拾壹圓七拾五錢貳厘　米代
一仝三圓二拾八錢貳厘　味噌醬油鹽類
一仝七圓貳拾錢八厘　肉野菜類
一仝八圓拾五錢五厘　炭薪油
一仝百三拾三圓八拾九錢七厘　病人費及消毒費
一仝九圓三拾八錢四厘　器具代及修復代
一仝壹圓三拾九錢八厘　大婚廿五年奉祝費
一仝八圓　給料及手當
一仝四圓六拾六錢五厘　運賃及車代
一仝九拾錢　蠟燭其他消耗品
一仝八拾三錢　郵税新聞代
合計金貳百九圓四拾七錢壹厘

第三月分收支決算表

一金五圓六拾錢五厘　第二月ヨリ越高
一仝貳百三圓八拾六錢六厘　三月分寄附金高
合計金貳百九圓四拾七錢壹厘
一金貳百九圓四拾七錢壹厘　第三月中支出高
差引過不足ナシ

第三月分寄附物品之部

一菓子壹袋楠木鉢三　東京　ゲップ孃
一薩摩芋一俵　河越　柳川ヤス子
一風呂敷包二個、毛糸類手拭一、足袋三、襦袢三、袷シャツ一枚　京都　無名氏
一切類チルシャツ一、足袋一、　無名氏
一菓子一袋　東京　藤林氏
一大小袖ナシ六枚　横濱　眞友會
一綿チル單衣拾壹枚巻三股引一肌着十一腰帶羽織各一袷四靴一足袋三足袋十五帶メ三切類　東京　明治女學校有志諸氏
一女學雜誌評論婦人矯風雜誌禁酒雜誌信仰之友　各社惠贈
一護教每號　東京　中島虎象氏
一わらべ六冊づゝ　仝　無名氏

第三月分實業部報告

一金三圓三拾九錢貳厘五毛　前月ヨリ越高
一金六圓拾三錢　五毛　三月分收入高
合計金九圓五拾貳錢三厘
一仝四圓三拾錢八厘　絹取器械代
差引殘金五圓貳拾壹錢五厘　越高

第四月分報告

寄附金之部

一金貳拾錢　東京　無名氏
一仝三拾錢　青山　英和學校生徒某々氏
一仝壹圓　新井キク子
一仝五拾錢　北多摩郡渡邊正三氏
一金貳拾錢　糸井副島兩氏
一仝五圓　京都　グリング氏
一仝拾錢　仝　無名氏
一仝五拾八圓九拾九錢　米國　無名氏
一仝六錢　横濱フエーリス女學校無名氏
一仝拾圓　東京　鈴木雅子
一仝貳圓　仝　齋藤音作氏
一仝拾錢　仝　無名氏
一仝六圓拾貳錢　米國マッサチューセッツ州保羅教會
一仝拾錢　東京　ミセス、チング
一仝三拾錢　山崎シゲ子
一仝壹圓　東京　福富一敬氏
一仝貳圓七拾錢　長崎　梅香崎女學校王女會
一仝壹圓　松崎柳子
一仝五拾錢　今村スエ子
一仝五拾錢　三宅田鶴子
一仝壹圓　高眞二氏
一仝五拾錢　山田都子
一仝五拾錢　高眞子
一仝七拾貳圓九拾錢　米國エヤ州デラウ婦人會(ミセスプリンクリー取次)
一仝四圓四拾四錢　仝國仝州王女會(ミス、レヤ取次)
合計金百七拾九圓九拾壹錢

第四月分支出之部

一金四拾圓六拾四錢　米代
一仝七圓三拾三錢貳厘　肉野菜代
一仝壹圓八拾錢八厘　味噌醬油類
一仝五圓貳拾四錢五厘　炭薪油代
一仝八拾四圓七拾六錢三厘　病人費及消毒費
一仝三圓六拾四錢一厘　教育費
一金壹圓六拾壹錢六厘　器具代
一仝拾圓貳拾錢　給料及手當
一仝貳圓九拾八錢　旅費運賃車代
一仝拾七圓五拾五錢　垣用植木代
一仝七拾錢五厘　履物代
一仝壹圓五拾三錢　郵税新聞代及紙
一仝八拾九錢五厘　消耗品
合計金百七拾八圓九拾錢五厘

第四月分收支決算表

一金百七拾九圓九拾壹錢　第四月分寄附金高
但シ繰越金ナシ
一金百七拾八圓九拾錢五厘　第四月分支出高
差引殘金壹圓五厘　第五月へ越高

第四月分寄附物品之部

一袷二單衣一足袋六帶類二切及雜書類　横濱　フエーリス女學校有志諸氏
一鷄卵玩具襦袢四塁二十ヨダレカケ五食品類　大坂　某女史
一足袋六反物二反羽織一襦袢一綿入二袷四前垂股引一手袋一帶一　東京　婦人老人會
一小供洋服五帽子一　仝　ミス、ゲップ
一メザマシ時計一個　仝　明治女學校愛之睦
一女學雜誌評論婦人矯風雜誌禁酒雜誌信仰之友　各社惠贈
一禁酒新報　副島八十八氏
一わらべ六部　無名氏

第四月分實業部報告

一金五圓二拾壹錢五厘　前月ヨリ越高
一仝拾壹圓七錢九厘　四月分賣上高
合計金拾六圓貳拾九錢四厘
一金八圓貳拾三錢　原料品代
差引殘金八圓六錢四厘　越高

第五月分報告

寄附金之部

一金五圓　王女會中央部
一仝三拾錢　北多广　地引某氏
一仝九拾錢　東京　小林光茂氏
一仝五拾錢　仝　戸川ミチ子仝メツ子
一仝三圓　青森　青森教會
一仝拾圓　米國　ミス、ペーヂ
一仝五圓　東京　フランシス氏

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

一金貳拾圓　横濱　無名氏
一仝壹圓　東京　ミス、チング
一仝拾圓　米國　無名氏
一仝一圓　河上新太郎氏
一仝拾圓　盛岡　美露々氏
一仝五拾錢　東京　小林マス子 チヨ子
一仝三圓三拾五錢　東京　明治女學校愛之睦
一仝三拾錢　佐渡相川町日曜學校生徒
一仝三圓　山梨　英和女校學共愛會
一仝三拾六錢　東京　三上久満三氏
一仝四拾圓　米國　無名氏
一仝貳圓　東京　日高善兵衛氏
一仝貳圓　靜岡　靜岡女學校王女會
一仝六拾五錢　野村トメ　野口ユカ　木村キン　星ツネ　安井テツ　塚本キン　諸氏
一仝三圓　東京　紅葉會
一仝貳圓　東京　ミス、フルベッキ
一仝壹圓　東京下谷教會婦人親和會
一仝壹圓四拾五錢　紀伊新宮基督教會有志諸氏

合計金百二拾五圓九拾壹錢

第五月分支出之部

一金五拾壹圓四拾壹錢五厘　米代
一仝五圓八拾八錢五厘　肉野菜類
一仝四圓九錢九厘　味噌醤油鹽類
一仝三圓九拾三錢貳厘　炭薪油
一仝四圓拾五錢五厘　器具代
一仝六圓五錢　教育費
一仝八圓五拾錢　給料及手當金
一仝五圓六拾五錢　乳兒牛乳及コンデンス代
一仝八錢　履物代
一仝四拾五錢　筆紙墨代
一仝六圓六十二錢　旅費運賃車代
一仝廿壹錢六厘　新聞代
一仝壹圓廿五錢　地久節奉祝及送別會費
一仝四圓八拾貳錢貳厘　税金
一仝七圓四錢　埋葬費
一仝貳圓拾錢　郵税及電報料
一仝七拾錢五厘　人足賃
一仝八拾錢　小共寫眞代
一仝拾八錢貳厘　雜費

一金拾貳圓六拾八錢九厘　病人費

合計金百貳拾六圓貳拾六錢

第五月分收支決算表

一金壹圓五厘　前月ヨリ越高
一仝百貳拾五圓九拾壹錢　第五月分寄附高
小計金百貳十六圓九拾壹錢五厘
一金百貳拾六圓貳拾六錢　第五月分支出高
差引殘金六拾五錢五厘　越高

第五月分寄附物品之部

一西洋風人形　米國　ミセス、ブリンクリー
一筒袖四枚風呂敷一編
一袢二前掛三　横濱　眞友會
一胸當四十二　東京　秋間爲子
一襦袢五綬巻一　仝　紅葉會
一女學雜誌評論婦人矯風
一雜誌禁酒雜誌信仰之友　各社惠贈
一わらべ六部づゝ　東京　無名氏
一禁酒新報　副島八十八氏

第五月分實業部報告

一金八圓六錢四厘　前月ヨリ越高
一仝六圓九拾貳錢七厘　五月分賣上高
合計金拾四圓九拾九錢壹厘
一金三圓拾貳錢　本月分支出高
差引殘金拾壹圓八拾七錢壹厘　越高

第六月分報告

寄附金之部

一金六拾貳錢　東京　傳道女館
一仝壹圓　下谷教會婦人親和會
一仝貳圓　仙台　ミセス、スヮルツ
一仝貳拾四錢　仝　有志諸氏紙屑代
一仝三圓　東京赤十字社病院內矯風會員　佐藤楢子外有志諸氏
一仝貳拾貳圓　東京　ミス、フルベッキ
一仝貳圓　無名氏(小宮氏取次)
一仝貳拾五錢　埼玉　前田德平氏
一仝貳拾五錢　仝　國分光次氏
一仝貳圓　仙台　スヮルツ氏
一仝壹圓　愛媛　矢野友代氏
一仝壹圓　仙台　シュナーダー氏
一仝壹圓　仙台東北學院ホイ氏
一仝五圓　仝　ミラー氏
一仝貳圓　仝宮城女學校ホイ氏
一金三錢　仙台勞働會武田眞香氏
一仝貳圓七拾壹錢八厘　東京　小島清子

一金四拾八圓三拾壹錢　米國ヴアルヂニヤ州 ヘレン、ヂキンソン
一仝卅五圓壹錢　米國　無名氏
一仝五圓　東京　フランシス氏
一仝壹圓　東京　無名氏

合計金百三拾五圓四拾貳錢八厘

第六月分支出之部

一金三拾九圓貳拾五錢四厘　米代
一仝五圓九拾八錢八厘　肉野菜代
一仝三圓四拾貳錢六厘　味噌醤油鹽類
一仝八圓八拾七錢九厘　炭薪油代
一仝三圓六拾壹錢九厘　器具代
一仝四圓三拾錢七厘　蚊帳及被服費
一仝六圓六拾五錢五厘　教育費
一仝六拾錢　郵税
一仝九圓五拾七錢壹厘　病人費
一仝拾三錢五厘　新聞代
一仝拾四圓五拾錢　臨時雇給料及手當金
一仝壹圓拾五錢　生梅代
一仝九拾五錢　紙代
一仝五圓貳拾錢　墓地費
一仝四拾八錢五厘　履物代
一仝六拾五錢八厘　雜費
一仝四圓拾錢　乳兒牛乳代
一仝三圓七拾四錢　運賃車代

合計金百拾三圓貳拾壹錢三厘

第六月分收支決算表

一金六拾五錢五厘　前月ヨリ越高
一仝百三拾五圓四拾貳錢八厘　本月分寄附高
合計金百三拾六圓八錢三厘
一金百拾三圓貳拾壹錢三厘　六月分支出高
差引殘金貳拾貳圓八拾七錢　越高

第六月分寄附物品之部

一婦人洋服上着七枚　東京　ゲップ氏
一菓子一袋　東京　立教女學校同窓會
一教理講話　東京　基督教草新會
一女學雜誌評論婦人矯風雜誌
一禁酒雜誌信仰之友　各社惠贈
一わらべ六部づゝ　東京　無名氏

第六月分實業部報告

一金拾壹圓八拾七錢一厘　前月ヨリ越高
一仝廿九圓七拾三錢八厘　本月分收入高
合計金四拾一圓六拾錢九厘
一仝拾九圓拾錢六厘　本月分支出高
差引殘金貳拾貳圓五拾錢三厘　越高

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

俳諧史傳　全

正價三十錢　郵稅四錢

左は斯文學に堪能の士と聞こえし函館新聞主筆、正味岡野敬胤氏（城南評論の借着居）が 青山評論紙上に於て本書を批評したる言なり

寺山星川君か淨瑠璃史を出す後數月ならず、今又小此木信一郎布川孫市兩君が著はすところのこの著出づ、青山の學窓の文庫にはかの淨瑠璃史とこの俳諧史傳は別段の意味をもつて珍藏され、青山評論の紙上には別段の意味をもつて紹介され、之を歡迎し之を名譽とせざるべからざるなり、

小此木君が文才ある布川君が學識ある同人間に夙に傳ふるところなり、これよりさき布川君はすでに「相思戀愛之現象」の著者として世に知られたり、近頃また評論（女學雜誌社出版）上に社會學の講壇を開く、君が究苦の間孜々として斯學のために殆んど眠食もわするゝばかりなるに同窓間亦尤も敬重するところなり、今この俳諧史傳に接す、僕豈に拍手快と呼ばざらんや、兩君がこの著は蓋し兩君と雖も滿足して出版せ　にはあらざるべし其序言は兩君が正直なる腹臓なきところを言盡したり、この書に存する過失錯誤は兩君も亦た自認するところなるを知る、しかれどもこの錯誤過失はこの書の全躰を傷つくるにあらずまた俳諧發達の大勢を察知するに害あるものにあらず、古今俳書紛々千万を以て算すべし而して一目瞭然歷代俳諧の變遷を察し系統を辨ずるものよくこの書の如きものある乎、俳諧の史記として頗る其要を得たるものといふべし

友人克水君（大野洒竹君）は文學界に於てこの書に對し隨分やかましき注文をなせり克水君が古俳書に富みてその年歷に精しきこの書に對して不滿足なるは勿論なりしかれども克水君が望みし如き條ははじめよりこの著者があまり重きをおかざりしところなるべき乎、素より兩君は俳家にあらず、ゆへに事實の考證に於てははじめより頗るその材料に乏しかりしならん、また甚だ探究を要せざりしならん、何となれば大躰に於て變遷發達系統を明にせんと欲するはその眼目にてありしなるべければなり、克水君と雖とも大躰につきては恐らくこの書に異議なかるべし、しかれば著者の目的はまづもつて達せしといふべきものならん、

元祿以后の俳諧に於て詳記せざるを難ずるものあり、（克水君も）蓋し俳諧のうへよりいへば所謂五色墨時代所謂復興時代等觀察すべきもの多かるべしと雖ももし大躰よりいへば元祿以后は略叙するもさして俳諧の面目を失するものにあらず、僕は思ふ、もし芭蕉を中心として精叙せばこれが前后は略叙するも所謂俳諧の發達變遷を知るにはさし支へなくしてそれにて澤山なるべしと、もし觀察の點こゝにありとせば克水君の所謂杜撰きはまりなき俳家奇人談一部にてもその材料にはあまりあるべし、只だその料理如何にあるのみ、僕をしていはしめばむしろ俳諧史傳はちと材料が澤山すぎて兩君が觀察點を脫して枝葉にはしりたるが爲に往々誤解さるゝものあるにあらざる乎、もし兩君がこの書を訂正せんとせば僕が注文は考證の精疎にあらず（これは克水君の如き人にゆづるべし）よろしくその時代を今一層明白にあらはすにありすなはち當時の他の文學との關係もしくは社會との關係等より俳諧の變遷を明白にするにあり、蓋し布川君の如きこの點に於ては尤も得意のところなるべし、これに出ずして彼に出しは蓋し材料討究の間俳味にかぶれ自ら俳諧以外に立つを忘れ俳諧以内にまきこまれ給ひしによるものにあらざる乎、

余輩はこの點に於ては山路愛山君の「平民的短歌の發達」をもつて簡約にしてその要を得たるに服せずんばあらず、二君もつて如何とす、幸ひに妄言を恕せよ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評論 第廿六號要目

知行安合一論 知と行と平安と、三者異体か、異体同性か、こゝに其の合一を論明して別に陽明先生に問ふ。

日本人海外傳道論 方今我黨の大策は、日本人海外傳道に在乎するより善きはなしと、些さか抱負を吐て小經綸を訴ふ。

こだま集 茲に文壇の新才子、其妙えなる詩想を新らしき吟体に寓し、以て世上の知己に問はんとす。讀者特に一顧せよ。

大勢一轉を看取す 眇か聽かわれ知らず。茲に自己眼睛に玲瓏として映出する所ろを斷言す、ひとり知人の同情同熱をまつ耳。

女學雜誌 前號要目

夏を歡こぶの辭 誰か夏を嫌ふ、夏や太だ愛すべし、茲に其の德をかぞへ其美をあげ、盛んに之を歡迎するのこゝろを表す。

會津城の婦女子 籠城中の婦女子が心血今回の紙上に淋漓たり、三たび死を決し一たび爆裂彈にうたる、何んぞ其の悽壯なるや。

罪人に同情を表す る、これ小此木氏が崇高の筆に成、聖溫の同情露のうるほふが如く、無情漢を戒しむる所、天の雷の如し。

黒き岩のおしへ 嬢子インジローの文を譯してあやしき黒岩のおしへを傳ふ、孤女よなく〳〵一燈をてらす、功德岸上の燈臺よりも高し。

文學界

第十九號　七月三十日發兌

闇夜　一葉
地獄の旅　破蓮
三日風流　禿木
樂堂餘塵　あやめ
塙團右衞門　殘花
夜半翁蕪村　酒竹

其他時文には隣の女○風來山人○滑稽名作集○西鶴全集○明治文庫○亞細亞の評あり

發賣所　女學雜誌社書店

生徒募集

○三年二年一年豫科甲乙各級へ各十名限募集
○申込九月九日迄

大阪道修町八百屋町角
關西女子高等學校

教授科目
○和漢文學○英學○珠算筆算○地理○歴史○博物○生理○物理○家政家事○婦人衞生育兒○作文○習字○唱歌○風琴十三弦琴○活花○茶式○毛筆書○幾何書○和洋裁縫○編物○刺繡
○內外教員十四名裁縫編物ハ最モ速成ヲ主トス
○寄宿舍ノ設アリ

女生徒募集

一本校の普通學部は高等科普通及ひ豫備科より成る又別に職業部を置く但し來學期には築地海岸學校は本校に合併すへし
一寄宿舍は百事完備す
一入學試驗は九月十一日午前九時
一規則の入用あらば郵報次第送呈すへし

明治廿七年八月
東京市赤阪區青山南町七丁目
東京英和女學校

本誌代價

冊數	定價前金	市外定價郵稅共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊(半ヶ年分)	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊(一ヶ年分)	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)	一回	前金十錢
同	三回以上	一割引
同	六回より上	二割引

○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。
但し不道德なる廣告は謝絕す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにして一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增と定む。

發行所　東京府北豐島郡王子村下十條八百五十一番地　女學雜誌社
編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三
發賣所　東京市神田區表神保町六番地　女學雜誌社書店

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地秀英舍工場印刷(電話十九番)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY